寧夏回族自治区中衛市における緑化活動

金沢市日本中国友好協会
事務局長　元藤　映了

当協会では今年も植樹訪中団を結成し、５月末～６月初旬にかけて、植樹の現地を訪問、記念植樹や現地スタッフとの交流をしてきた。日程の都合で最初に訪れたのは、我々の先輩格であり植樹活動の智恵を拝借しているNPO法人世界の砂漠を緑で包む会（事務局は金沢市）の活動拠点である内蒙古自治区阿拉善盟である。これまでに９回訪問しており、砂漠地帯における植樹活動を勉強させてもらっている。今回はイナワラを用いた草方格の設置と植樹作業を体験した。５月末の騰格里（テンゲル）砂漠の日差しは強く、１時間余りでギブアップ、建物の中へ逃げ込んでしまった。

次いで、寧夏回族自治区の南西端に位置する中衛市（助成事業３年目を実施中）を訪れた。標高が２，０００ｍ前後で、降水量も極端に少なく土地も痩せた砂漠地帯である。苗の活着に一番気を使うところであり、風や砂嵐対策、施肥、灌水など困難なことも含め工夫しながら植樹活動に取り組んでいる。バスで中衛市に入ると、街路樹、緑地帯が良く整備されており緑の多い街と感心し、こんなところで植樹活動もどうかとさえ思ったが、市街地を抜け山手に進み、現地が近づくにつれ、景色は一変した。幹線道路から２０分ほど入っただけで、騰格里（テンゲル）砂漠の南端に当たるこの地は真に見渡す限りの砂漠地帯である。

すでに草方格が設置されている現地で、現場のスタッフが考案し、手作りした新兵器＝植樹器を使って、使い方を教わりながら植樹をした。植える位置に苗の根を置き、そこを植樹器の先で挟み、取っ手を持って、下の段に足をかけて踏み込むだけ（土中４０ｃｍまで入る）で植樹完了、後は１回だけたっぷりと潅水すれば活着する。穴を掘る手間、苗を手に持ち土で

埋める手間、潅水する手間が省け効率的な作業が可能となる。砂漠地帯だからこそできた工夫であるが、寧条のように長くて太めの直根がある樹種であれば抜群の効率向上が図れる。

雨の少ない地域で、植樹適期には暑い日差しを受けることと砂漠地帯という土壌条件から必要に迫られて考案されたものであろうが、そのアイデアに感心することしきりである。翻って、市街地の緑はこのような現地スタッフの熱意と地道な植樹活動により整備され、木も育ち、環境を変えてきた成果だと実感し、我々の活動もやがてこのような緑の環境を創出するものと期待しながら現地を後にした。